The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	新古今集『をられぬ水』のことなど
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1981, 38, p. 10-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68674
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

新古今集『をられぬ水』のことなど

小島吉雄

一

わたくしは昭和十九年五月刊行の拙著『新古今和歌集の研究』所収の「新古今和歌集注釈書の話」の中で、学習院図書館所蔵本に『をられぬ水』という新古今集注釈書があって、その注釈内容は一見に値するものなることを記したが、その著者清風という人については分明でないから、博雅の士の示教を得たいと述べた。すでにその際述べた如く、『をられぬ水』はわたくしが初めて紹介したのではなく、大正十五年刊行の福井久蔵先生の『歌書綜覧』に紹介されているのであって、その記事の中で福井先生は著者清風は名古屋の人大鐘清風であると記されているが、『をられぬ水』の著者が果して大鐘清風であるかどうかは不明であった。わたくしは福井先生に面接した時それについて尋ねてみたけれども、明答を得ることができなかった。その後、昭和四十四・五年ごろのことだったかと思うが、名古屋の尾崎知光氏から同氏執筆の福住清風に関する新聞記事を贈られて、『をられぬ水』の著者清風というのは、信州飯田の人福住清風のことであると教えられた。その後、学弟三輪正胤君は飯田の人であるから、同君に会った時、福住清風のことを話すと、よく調査してお知らせしましょうとのことであったが、同君は飯田市立図書館に足を運んで清風のことを調査せられたらしいことは同図書館長から聞いたけれども、どういうわけか、その調査結果を知らせてはくれなかった。それから後、また学弟大坪利絹君に福住清風のことを話したら、同君はあちこち奔走して古本屋から村沢武夫氏の『伊那歌道史』という本を探しあてて持って来てくれた。この書物を読んで、福住清風という人の伝記や学統などがくわしくわかり、その著述に『をられぬ水』というのがあり、また飯田市立図書館には『をられぬ水』をはじめその遺著が写本で多数所蔵されていることを知った。一度飯田を訪ねたいと思った。しかし、当時健康を損ねていたので、心にかけながらも飯田を訪ねることができなかったが、先般やうやく伴利昭君の介添えで、宿願を果すことができた。この一文は、その結果の記録であり、それに関連しての感懐である。

二

十年ほど昔のことである。どこかの大学の大学院の学生とおぼしき人から『をられぬ水』小島本というのを見せよという手紙をもら

った。わたくしは寝耳に水の思いがしたので、『をられぬ水小島本』というようなものは存在しない旨を返事すると、折り返して、『国語国文学研究史大成新古今集』に小島本というのが出ている。だから見せてくれというのだと言って来た。そこで、小生のところには学習院所蔵の『をられぬ水』の写しはあるが、不完全なものかも知れないから、直接学習院大学図書館へ行って原本を見せてもらわれるがよいと返事をした。そして、急いで書庫から『国語国文学研究史大成新古今集』を取り出して調べてみると、なるほど小生所蔵の『をられぬ水』の写本がそのまま掲載されている。もちろん、終りに括弧をつけて「学習院大学図書館蔵本・小島吉雄学習院大学蔵本影写本」とことわり書きがあるが、まさしくわたくしの影写本の翻刻である。『をられぬ水』の解説も「清風が大鐘清風であると一応は考えられている」というところを除いて、あとは全部わたくしの「新古今和歌集注釈書の話」の敷き写しである。わたくしは一種の腹立たしさを覚えた。故山崎敏夫君は大学時代の同窓でありかつ終生の親友である。だから二十年ほど前に同君から新古今集関係の小生所蔵の資料類を全部しばらく貸せといって来たので、快くこれを貸した。その中には、上記『をられぬ水』の写しのほかに『石園歌話』や『宗長秘歌抄』等々の写しもあったのである。同君はわたくしには無断で、それらを『研究史大成』に転載し、解説にもわたくしの文章を利用したのであった。迂闊にもそのことをわたくしは全然知らなかったのである。尾崎知光氏は、そのわたくしの山崎君に貸した『をられぬ水』の影写本をわたくしには無断で山崎君から転貸してもらって、それによって「をられぬ水と福住清風」という一文を愛知県立大学の雑誌『説林』第十八号に掲げた。その文中に同氏は小島吉雄博士本について論じ、併せて飯田市立図書館本『をられぬ水』と小島博士本との比較を述べた。『説林』はその初期の頃は毎号もらっていたのであるが、のちにはくれなくなったので、わたくしはその第十八号を見ていない。そのため、尾崎氏がそういう文章を発表しておられることを飯田市立図書館の館長今村兼義氏に教えられるまで知らなかったのである。これまた迂闊といえば迂闊千萬であった。尾崎氏によってはじめて家蔵影写本に小島吉雄博士本という光栄ある折紙がつけられたのである。大学院学生が小島本を見せよと言って来たのも宜なるかなと思った。

わたくしは学問のためには書物を見せ惜しみするものでない。しかし、学問の世界にも礼儀と節度というものがある。山崎君が幾ら親しい間がらだからと言ってわたくしの本を活字にして公にする以上、一往わたくしにその旨諒解を得べきであり、また他人に転貸するにも、一往わたくしに断るべきである。また尾崎氏もわたくしの本を利用して文章を書いたならば、その文章の抜刷りぐらいはわたくしに送ってくるのが礼儀というものである。わたくしもそれによってまた益を得るからである。ましてやわたくしの本に小島本と命名し、学習院本のほかに別本が存在するかの如き印象を学界の一部に与えることは心すべきことがらである。恐らく当時山崎君や尾崎氏から諒解を求めて来たら、わたくしは公刊するのならば、わたくしの写本よりもその原本である学習院本によるべきであると答えたであろうと思う。その理由は、学習院本は清風自筆のもっとも信憑すべきものであり、しかもわたくしの写本はその成立過程からなお信憑性に不十分な点があるからである。

わたくしは昭和八年十一月から同九年三月までの『巌橿』という

雑誌に四回にわたって「新古今和歌集注釈書の話」という文章を載せている。これは昭和八年夏奈良県の辰巳利文君主宰するところの奈良文化研究会の夏季講習会に招かれて話したことの内容を文章にしたものであって、わたくしの『をられぬ水』の話は、その頃から始まっているらしいのである。わたくしの『新古今和歌集の研究』中の「新古今和歌集注釈書の話」は、この『厳橿』の拙文をもとにして、さらにわたくしのメモ帳によって補ったものである。わたくしはその昭和八年ごろから昭和十八年にかけて訪書の旅を続けていたので、福井久蔵先生の豊島のお宅へもしばしばお邪魔して、種々ご示教を仰いだことであった。福井先生のご紹介で学習院図書館をも訪ねて『をられぬ水』三巻本を見たのも、その間のことであったが、福井先生に依頼して先生の知る人に学習院本の『をられぬ水』を影写してもらったのは、すでに大東亜戦争の始まった頃であった。そして福井先生からその影写本を送られた頃は、戦争も苛烈になっていて、上京も不可能になっていたから、残念ながらわたくしは上京してその影写本と学習院の原本とを校合する機会を得ずして、ついに今日に至っている。従って、わたくしの影写本がどこまで原本に忠実であるかは、われながら自信がないのである。学に忠実であるためには、しかも尾崎氏のように忠実に小島本と飯田図書館本とを比較する以上は、わたくしの本よりも直接学習院本に当るべきである。その方が、学に忠実なるものというべく、また学界を益することも、より多大であろうし、学者たる者は、それだけの良心と労力とを惜しむべきではない。

三

学習院本『をられぬ水』は上中下三巻であって、下巻は本居宣長の『美濃の家つと折添』の補正的注釈である。これを三冊とも新古今集の歌の注釈のように書いたのは、福井先生であり、わたくしもまたその誤りを犯している。このことは尾崎知光氏の指摘するとおりである。飯田市立図書館には『をられぬ水』は二部あるが、二部とも新古今集だけの注釈書で五冊の完本である。学習院本よりも注釈歌集が多いのである。そのことは尾崎知光氏の上記『説林』の論文にくわしく記述されている。郷土史家市村咸人氏編するところの『下伊那郡誌資料』下巻（下伊那郡役所発行）等には『をられぬ水』六巻六冊となっているが、実際は五巻五冊である。『下伊那郡誌資料』にも「をられぬ水の歌によりて名づく」とあるから、その書名は、尾崎知光氏のいう如く、古今集春上の歌「春ごとに流るる川を花と見てをられぬ水に袖やぬれなむ」の歌から来ているのであろう。『下伊那郡誌資料』の福住清風の条には、今日残っている清風の著書十一種を列記し、それらに詳細な解説を加えている。また、同書には、下伊那郡座光寺村（現在は飯田市座光寺）の北原家には『をられぬ水』は『野中水』の題名で伝えられていて、やはり六冊本であるように記されている。しかし、飯田市立図書館長今村兼義氏がわたくしのためにわざわざ北原家を訪問せられて、調査の結果を知らせて下された書簡によると、北原家の『野中水』もやはり五冊本で、その内容もほぼ飯田市立図書館本の『をられぬ水』と同じであるが、もちろん小異はあるとのことであった。なお、北原家には、この書のほかに清風の著書の写本が数種保存されている由である。

北原家はもと座光寺村の名主の家がらであり、福住清風の弟子北原稲雄の子孫である。

学習院本『をられぬ水』には清風の子久樹という人の序文があって、それには天保六年弥生という識語があり、またその序の内容には桜木に彫って書物として上梓する旨をしるしているから、この写本はそのまま印刷に付するつもりで浄書され江戸へ運びこまれたものと思われる。しかし、それは結局上梓されず、めぐり巡って学習院の所蔵に帰したらしい。その序文は本文とは別筆で、本文の方は飯田図書館本と同筆であるから、清風の自筆と考えられる。また、北原家の『野中水』も清風の自筆であって、その奥書には「天保十四年九月笹垣清風しるす」とある由である。これも飯田図書館本と同筆ということであるから、清風は幾つも自筆本を作って、それを高弟たちに頒ち与えたらしく、飯田市立図書館にも同じ自筆本が二部存在している。清風は嘉永元年九月七十一歳で没しているから、天保年間は清風晩年もっともその学問の円熟した頃ということができる。そして、今日残っている自筆写本はいづれもその天保年間に書写されたものであり、その写本の識語から推定して、学習院本が先きに出来、飯田図書館本や北原家本が後に出来たものであろう。後のものほど内容が精緻になっているが、いずれも『美濃の家つと』や『尾張の家つと』の説を参照して、それらの説を訂正したり補足したりしており、採りあげている新古今集の歌も『尾張の家つと』が選抄したものの範囲内の歌である。ただし、「家つと」の説としてあげているものには、『美濃の家つと』の説を指している場合もあれば、『尾張の家つと』を指している場合もある。また飯田図書館本や北原家本は新古今集だけで五冊になっていて、『美濃の家つと折添』は含んでいない。飯田図書館には『折添』の歌については別に『なごりのなみ』上下二冊として残っている。そのことについては詳しくは前記『説林』の尾崎知光氏の解説文にしるすとおりである。

ところで、学習院本『をられぬ水』の序文に、清風の子久樹という人の識語があると前述した。清風には春年と号する子のあることはわかっているけれども、久樹という子のあることは明らかでない。しかし、学習院本『をられぬ水』の序文で見る限り、久樹という子のあったことは明らかである。また、『伊那歌道史』の附録年表によれば、植松茂岳が飯田に来た時、文政十一年六月二日の茂岳を囲んでの酒席に清風等六人が出席しているが、その中に久樹という名が見えるから、当時久樹と名乗る人が、それが清風の子であるかどうかは別として、飯田にいたということは明らかである。『伊那歌道史』の著者村沢武夫氏も久樹という人のことはご存じでない。また、昭和二十二年の飯田の大火で、福住家のあたりも焼失したから、同家所蔵の遺品のすべてがその時烏有に帰し、清風の子孫の人も駒が根の方へ移転してしまって、清風家の墓も無縁墓になっているから、今日では久樹なる人のことを知るよしもないそうである。清風一家の墓は飯田市江戸町の正永寺にあるから、わたくしは念のため正永寺を訪ねて見たけれども、現住職は数年前に入山せられたので、昔のことはご存じなく、また古い過去帳は見るによしなく、現在では当寺檀家の過去の過去帳から抄出してそれを没年月順に配列した一覧表のようなものが残されているだけで、それによっては親子兄弟関係とか本家分家の関係などは全然わからない。恐らく寺の過去帳では養子に行った人の場合などはその名前や没年は養家の菩提寺

の過去帳に所属するだろうから、当寺の過去帳には出てこないであろう。久樹という人のことは現在のところ結局わからない。ただ、わたくしの一つの推定として、清風の嫡男春年はまた松年とも号したというから、松は長寿の樹であるに因んでまた久樹とも号したのではないかということができる。これは単なる推定に過ぎないが、もし春年と久樹とが同一人物だとすると、年齢的にも、その経歴の上からも矛盾が生じない。福住春年は安政三年五十八歳で没しているから、文政十一年は二十八歳ぐらい、天保六年は三十七・八歳に当る。春年はまた父に歌文を学び、著書もあるよし『伊那歌道史』等に記載されている。現存の清風の家系には、清風の子に春年一人だけしか記載されていない。

四

『伊那歌道史』によると、福住清風は早く、文化二年に服部菅雄に入門したという。菅雄は遠江の人であり、遠江国島田の宿の服部家の養子となり、本居宣長に入門し、加茂真淵門の内山真龍とも同郷のよしみで交際があったようで、信濃なる菅雄へ真龍から贈った画賛が現存している。菅雄が飯田に来たのは、文政の初年で、その時清風の家などでしばしば講筵を開き歌会を催したりしている。また、『伊那歌道史』によれば、菅雄より少し遅れて文政五年ごろ本居宣長門下の森廣主が飯田に来て、清風らと交遊があった。廣主はもと名古屋の医者であるが、この伊那の地に定住し、文政八年この地に没したという。国書に造詣深く、能辯であり、その影響は下伊那地方に大きかったということであるから、清風もまたその影響下にあったと言われるのである。その後、文政九年になって、名古屋の市岡猛彦が伊那の地を過ぎり、また同じ頃植松茂岳も再三飯田に来て、飯田地方の歌人と交際があった。よって、『伊那歌道史』には、清風の学問は服部菅雄・森廣主・市岡猛彦・植松茂岳の四人から継承しているようにしるされているが、果してどの程度までこれらの人々の影響を受けたかを明らかにしていない。清風は、新古今集の歌風を尊重し、、新古今集の注釈書をも書いている。上記の菅雄・廣主・猛彦は本居宣長の門下であり、茂岳は宣長門下であった父有信の家学を受け継ぎ、また本居大平等にも学んだ人である。つまり四人共鈴の屋直系の人であり、猛彦にはまた『新古今集もろかづら』の著書がある。すなわち、清風には新古今集尊重かつ注釈という点で宣長系歌学が影響していると信じてよろしかろう。

由来、本居宣長は新古今集をも尊重した国学者であり、自ら新古今集の注釈書をも書いている。従って、その門流には新古今集を崇拝する学者が多く、新古今集の研究や注釈がその門流から数多く出ている。清風が新古今集を崇拝して『呼子鳥』という歌論書を著し、新古今集の注釈書たる『をられぬ水』を書いたのも、やはり宣長系の学風を継承したものと言うべく、それも宣長より直接継承したというより、前記飯田訪問の宣長系学者からの学統を継承したと見るべきであろう。清風の住居の筋向かいに住した千葉葛野は、清風と年齢的に開きがあり、後には江戸に出て門戸を張った人であるが、飯田在住中は清風とも交渉があり、飯田にやって来た前記本居系学者の講筵にも列らなり、そのためであろうか、新古今集に深い関心を示し、『新古今集十人百首』という新古今集に対するすぐれた理解を示した著述をも残している。このことは、また清風等に本居系歌学が大きく影響した一つの傍証ともなるであろう。

清風は、その伝記によれば、伊那の地を離れたことなく、全く郷土歌人として終った人であるから、『信濃人物誌』等には載せられているけれども、その名は全国的に廣く知られておらず、『国学者伝記集成』にも出て来ない。上記のようにその学統は宣長系であることは確かであるが、細かい具体的問題になると、独学開眼の要素が強いように思われる。彼れは安永七年の生れであるが、文政年間までは専ら修学時代であって、前記の来伊那峡の学者に教えを受けながら、傍らまた自らも研学に努めたようである。清風は家業として賣薬商を営む傍ら、また貸本業をも営んだというから、書物を入手するには便益が多かったと思われ、宣長の著書なども夙く読んでいたであろう。そして、天保年代に入って初めて自家の歌学を樹立し、人にも教授したものと思われる。その著書で執筆年月の明らかなものは、いずれも天保に入ってから以後のものであり、その他のものも恐らく天保時代の書写と推定されるからである。また学習院本『をられぬ水』の序文は、清風家学創設の記念碑としてまずその新古今集注釈書を出版しようとした自負のほどを物語っているように思えるのである。

清風の学問は作歌の助けとするものであったらしい。従ってその著述も、歌語に特別に留意し、助詞の使用や語法に注意を払ったものであった。その証拠に、桃沢夢宅との論争なども専ら語格に関するものであったし、『ことのつかねを』という「てにをは」や語格に関する著書もある。『ことのつかねを』には宣長の『詞の玉緒』の影響が見られるようである。『詞の玉緒』は天明五年五月に出版せられている。清風は、また注釈書においても、助詞や語法に特別の注意を払っており、それが彼れの注釈の大きな特徴ともなっている。たとえば、『をられぬ水』の新古今集の歌の注釈についても、宣長や石原正明のように歌の価値判断についての論はほとんどしていない。歌の助詞や語法的解釈に専念しているのである。また、前にあげた歌論もしくは作歌法書ともいうべき『呼子鳥』を読むと、和歌には調べというものが非常に大切であって、そのためには歌詞の選択ということに深く留意しなければならぬと説き、例証をあげて懇切をきわめている。その例証から推定するに、清風は、本居春庭の『詞のかよひ路』などをも熟読していたように思われるのであるが、『詞のかよひ路』の本居大平の序文には文政十一年秋の識語がある。

五

清風はその作歌の範を新古今集に採った。しかし、新古今集からは定家や俊成女のような感覚的象徴派風な難解な歌風を学ばなかった。むしろ、俊成や後鳥羽上皇等の実感尊重の情緒派的歌風を学んだ。歌調は流麗であり、本歌取りもはなはだ巧みであるが、歌語の象徴的使用に欠けていた。その家集を『しづたまき』（別名『花かたみ』）という。今、その中から、一・二の例を引くと、次ぎのごとくである。

月前梅

もりくるか軒ばの月もうめがかも春やむかしの袖をたづねて

秋　夕

虫の名のまつとせしまの蓬生も鳴くねもかるる秋の夕ぐれ

右は本歌取りや縁語・掛け詞の一例である。前者は、新古今集春上の「梅の花誰が袖ふれし匂ひぞと春や昔の月に問はばや」等の歌

に本づき、後者は新古今集恋四の「ならひこし誰がいつはりもまだ知らで待つとせしまの庭の蓬生」を本歌としている。そして、「まつ」「かるる」を掛け詞とし、流麗の歌調を歌ひあげている。

日ぐらし

真葛はも秋風またでかへるべきけしきの森の日ぐらしの声

などは、新古今調の優麗な調べの歌の一例である。彼れのこのような歌風を彼れは新古今集の長所を継承したものと考えていたのであろう。「みよし野は山もかすみてしら雪のふりにし里に春は来にけり」の歌を激賞し（『呼子鳥』の説）、この「みよし野は」の歌を本歌にとって

みよし野は山もかすみてしら雪のふりし世しのぶ春はきにけり

という歌を作っているのである。新古今集の鑑賞者としては、その一面を捉らえて、他の一面を見のがしているものというべきであろう。尤も彼れの理解する限りでの新古今集の歌風をよく彼れの歌は模写しているということができる。

なお、言いおとしたが、『をられぬ水』において、清風は、助詞「に」と「より」とは互いに意味を通わして用いる場合のあることを力説し、たとえば、太上天皇の御歌「ほのぼのと春こそ空に来にけらし」の「空に」の「に」は「より」の意であるとし、「空より来にけらし」と解釈すべきであるとしている。また、「天の香久山かすみたなびく」の「天の香久山」は万葉集では「天降りつく天の香久山と歌われて天より降った山だと言われているから、空から春が来るのに縁があるのである（『飯田図書館本をられぬ水』）と述べている。これらによって、清風は万葉集にも相当造詣があったと考えてよかろう。彼れの学殖の一端をしのぶことができる。

要するに、清風は歌人を以て自らを任じていた。そして歌人として歌調を重んじるために歌語をも重視した。歌語を重視するために、古歌について歌語を勉強し、てにをはや語格の勉強もした。彼れの学問は、彼れの歌人修業の一環であった。

六

わたくしは、今、この一文を草しながら、飯田の町についての印象をまざまざと思い浮かべている。飯田市は昭和二十二年の大火の結果であろうか、新しい市街づくりに努力し、碁盤の目のような街路整備、整然とした家並み造り、所々に設けた小公園や噴水、りんごの並木通りに象徴される調和のとれた麗わしい街づくりに成功している。わたくしは、小雨にけぶる信号灯の火の美しさに心惹かれた飯田市内の一日を今も忘れることができない。山なみもまた美しく、人情にも厚い町であった。宿を主税町の三宜にとったが、そのこまやかな主ぶりには、心あたたまるものがあった。飯田市教育委員会の社会教育課長や正永寺のご住職や村沢武夫氏とそのご家族や飯田市立図書館の館長今村兼義氏をはじめ図書館員諸氏にも懇切にしていただいた。皆さんに深謝の意を表したい。

わたくしは飯田の町に幾日か宿った。居心地がよかったからである。そして、その間に、堀氏の長姫城址を見、菱田春草の旧居地を見、春草の墓を展した。春草は明治の中期に結城素明等と無声会を結成し、日本画壇に新風を画した人である。しかも、その無声会の絵画運動が金子薫園等の明治の新しい短歌における叙景詩運動に影響するところがあった。そのことを思い浮かべながら、春草を展墓したら、その傍ら近くに、日夏耿之助の立派な墓があった。日夏耿

之助は飯田の人であり、その晩年はこの郷里に帰って死んだ。わたくしには、詩人としての日夏耿之助よりも、『明治大正新詩史』の著者としての日夏耿之助の方が懐しいのである。若き日のわたくしがこの書に啓発された数々の思い出があるからである。心をこめてねもごろにお詣りをした。そして、わたくしは、その日夏氏の墓の並びに、高山樗牛なきあとの明治の論壇に活躍した帝国文学派の文人樋口龍峡の堂々たる墓を見出でたのである。龍峡は日夏氏と同族らしい。龍峡という号も天龍峡から取って来たものらしく、大正時代から郷里から代議士として出て政界にも活躍した由、その墓碑銘に誌されている。これまたわたくしにとって、なつかしい名であった。

飯田の図書館では、その書架の一部を区切って、郷土出身の文人の著作や郷土に因みある図書を限なく集めて展示し、一般に公開している。そのことを、わたくしはわが郷里の図書館と比較して、羨望をもって眺めたことであった。

伊那の地は、わたくしの恩人春日政治先生の郷里であるが、先生は上伊那郡の出身であり、飯田市は下伊那に属している。上伊那と下伊那とは、同じ伊那ではあるが、その間に山を挟んで、土地がらや文化に相違がある。その文化圏が相違しているのである。上伊那は高遠・諏訪を経廻して江戸に通じているが、下伊那は天龍川に沿うて三河遠江に交通の便を求め、名古屋の文化圏に属しているのである。福住清風等の文学もまたその例に漏れない。

（一九八〇年九月十日しるす）